

月刊 やちまなこ

2012.2.15 発行

No. 171

2 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



白く輝く湖面には週末を中心にワカサギ釣りのテントや釣り人たちの姿が見える。立春を過ぎても寒さは厳しくなるばかりで、日本海側は記録破りの大雪、釧路湿原のある道東地方は晴天の日が続く分、氷点下20度以下の日が数日あるようだ。

例年オオハクチョウが羽を休めていた水辺も氷が張り、主に代わりフロストフラワー（氷の華）が咲いていた。

陽射しを受け白く輝く湿原の中を観光客を乗せたSL冬の湿原号がゆっくりと走る姿が見えた。

コッタロ川と湿原のほとりから

140 2月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住. 中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

丹頂の第2コツ&タロが本日(10日)、子別れ致しました。“14, 15羽目に幸あれ!!”

日の出が早くなり、湿原内を蛇行する川も『結んで開いて』をくり返していたコッタロ第1, 第2川も開いて、春の扉が一枚だけ開いた様です。

思いのほか穏やかな如月に入って、さらに7日、列島を包んだ暖気がコッタロでは霧雨をもたらして日中+5℃を記録。最高気温が氷点下を抜け出した今、三寒四温の真っ只中にあります。たまさかに発生する低気圧が風のグリッサンドと又三郎の虎落笛とをつれてくる事もあるにはあるのですが、一方でその強烈な北からの風に吹き寄せられて遠くオホーツクにたどりついた流氷が根室、釧路方面へと南下し始めたのも例年より13日早いとか。“春の訪れ”を占うこの「地球の体温計」の動向は寒冷地に生きる者への明るいニュースと云えましょう。

そんな四温日和のまっ青な天空をダイナミックに舞う王者(写真)を下界にいてアングリと仰ぎみるのも、この時季限定の楽しみとなっております。

ところで野生の世界にじっと目をこらしていると、裸木の林立する庭ではシマエナガ8羽の群がしきりについでむ白樺の冬芽であったり(写真)、コゲラ、キバシリ、コアカゲラが四十、五十、ハシブト雀に混じって捕食しているのは、厳冬期に人知れず命をつなぐ虫や虫の卵であることを教えられるのです。

特筆すべきはバードレストランにしつらえた野鳥用の脂身、リンゴ、ミカン等々に地上を這うネズ公(写真)が食らいついて大胆にも真昼間、人を恐れぬ不敵な態度ではありませんか。近寄っても、その愛くるしい目玉でチラ!と一瞥されただけ。

“ま、いいか!!”と食物連鎖を底辺で支えてくれている彼等に

感謝こそすれ、追い払うべきではないと、多くの鳥獣のことを思いやり乍ら、ちょっと勘案させられた一件でした。

一日の終りに夕暮れのひと際鮮やかな色彩が浮かび上がらせる一瞬の景色には感謝の祈りを捧げずにいられませんね(写真)。



湿原の住人たち その131

ヤマガラ

ヤマガラがあるこっこの冬季限定バードテーブルに初めてやってきました。町内での目撃情報はあ
るものの、釧路湿原ではあまり見られない鳥です。餌台には常連のシジュウカラ、ハシブトガラ、ヒ
ガラ、ゴジュウカラ、シマエナガとともに混群の一員としてお目見えしました。体長は14cmでシ
ジュウカラと同じ位の大きさに見えます。他のカラ類は灰色と白と黒の三色が目立ちますが、ヤマガラ
の背中とお腹の赤茶色と額から頬にかけてのクリーム
色の二色が他のカラ類にはありません。学名の意味が変わったシジュウカラの仲間というのもうなずけます。じ
っくり行動を観察できる位居て欲しかったのですが…。
湿原で見かけたら教えてくださいね。



冬の散策を楽しみました



4日に自然ふれあい行事「塘路湖畔で冬芽ウォッチング」を釧路
湿原国立公園ボランティアレンジャーの大西英一さんの案内で行い
ました。樹木の冬芽を楽しむために、イラストを使って冬芽の名前
や形、特徴的な葉痕を紹介してから出発しました。フィトンチッド
の森とキャンプ場で、木の高さの違いや枝付きを見比べて、木がル
ールにのっとなって生えていることを易しくユニークに教えていただきました。冬芽では、特に念入り
に観察したミズナラ(写真右)は、ピンセットを駆
使して(写真左)丁寧にコート(芽鱗)をはがしていくと、薄いものがびっしりと30
~40枚もあり、見た目以上の厚着に驚くとともに、花や葉を寒さや乾燥から守って
春遅くまで開花させない工夫がわかりました。途中でカラマツの実を食べるエゾリ
スとの出会いもあり、散策を一層楽しいものにしてくれました。



ネムネムのくしろろうろ日記 Vol.35 「パラタクソノミスト」

釧路市立博物館で行われた、パラタクソノミスト講座(生き物を正しく分類する技術を身につける講座)に参加してきました。今回は昆虫の初級を受けたのですが、あなどるなかれ。普段私たちは「チョウ」「トンボ」となんとなく分けられるのは、実物が大きく、普段よく目に付くものだからなのです。みたことのない昆虫(例えば1cmにも満たない小さな昆虫など)を出されると、何の仲間かということすら、あやしくなります。そうになると顕微鏡でひとつひとつ昆虫の特徴を確認していかななくてはなりません。

自慢ではありませんが学生時代、この手の成績は悪かったのです。毎回標本の前で悩み、休み時間までずれ込むので、珍しく時間内に課題が終わると「今日は時間内に終わったね!」と先生からお褒め(?)の言葉を頂く始末。

あの頃よりは多少腕が上がっているかな?と期待しましたが、周囲がシャーレ2枚こなしているところを、私はようやく1枚。ああ、やっぱり私って変わってない、と思い知らされました。

辻 ねむ(標茶町郷土館学芸員)

1がつ 29にち

ばしょ くしろ



どうも私は、人とは違うところに目がいて考えこむ、悪いクセがあるようです。

